

岩手県江刺人首のキリスト教（二） ——教会消滅の現実に潜む地域人口の減少と 過疎化問題——

及川 宏幸

キーワード 奥州市江刺区米里地区 ハリストス正教 カトリック
地理的・社会的要因 過疎化 教会消滅

はじめに

岩手県奥州市江刺米里地区¹。ここは旧江刺市及び奥州市の最東端に位置する過疎地域である。しかし岩手県では唯一、明治期からハリストスとカトリックの二つの教会が存在する場所でもあった²。当

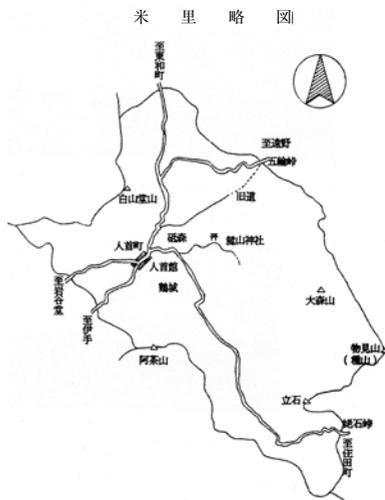


図1. 米里地区略地図
〔江刺教委「ひとかべ文学散歩」より
一部改変〕

- ¹ この地区はかつては人首村（江戸期）、米里村（明治8年）〔江刺市1990p223、岩手県教育会1925p87〕と称し、昭和30年に合併して江刺市米里〔江刺市1990p224、江刺市1987p758〕に、そして平成18年2月に合併して奥州市江刺区米里、さらに平成30年4月に奥州市江刺米里となる。旧江刺市及び奥州市の最東端に位置すると同時に北に和賀郡、東に遠野市と気仙郡、南に東磐井郡（現一関市）に接する各郡の境界に位置する丘陵山間地帯でもある。本稿では前稿「岩手県江刺人首のキリスト教」〔及川2018〕とは異にして地区全体を米里と称することにし、米里地区の中心地区である人首町のみ人首と記している。なお表題の「人首」は教会のある人首町と、その隣接地域という意味で用いたもの。ちなみに人首の地名の由来は、坂上田村麻呂に討伐された人首丸の潜居地であったことに由来している〔平凡社1990p293〕。
- ² 信者数が少ないため、人首ハリストス正教会は昭和58年に岩谷堂ハリストス正教会に合併し〔日本正教会R1年11月1日ホームページ〕、人首カトリック教会は昭和25年に水沢カトリック教会の人首支部〔故 薄井磯さん談〕、巡回教会となる〔水沢1982p6〕。そのためそれ以降、正式には人首ハリストス正教会という名称では無くなったと思うが、本稿ではカトリックも含め共に旧名称を用いて表記している。なお教会はかつてハリストスは米里字人首

初、過疎地なのにもかかわらず二つのキリスト教教会が存在するそのギャップに違和感と興味を感じ、平成2年から平成5年まで私的に調査に入ってみた。しかしその後日々の忙しさに紛れその調査データを放置したままであった。ところが平成5年当時、6家族（ハリストス）と4家族（カトリック）いた信者が、平成30年にはカトリックが0人、ハリストスはわずか1人だけになった事実を昨年知り、かつて調べた人首のデータがそのままであることを思い出し掘り起こすことと決め、平成30年と令和元年に再度補足調査をして執筆したのが本稿である。前回『東北宗教学14号』³では人首各教会の“歴史的・時代的要因”に焦点をあて、時代に翻弄される日本のキリスト教信者の姿を描いた。今回は人首教会が置かれている問題を、前回とは異なる視点の“地理的・社会的要因”から描いてみることを意図として執筆したものである。しかしながら執筆最中に、現信者と旧信者（平成5年現在）の情報が膨らみすぎて、予定していた「過疎化に至る前過程での、米里における基盤産業構造の変化」の項が収まりきらなくなったため割愛し、本稿では信者情報の整理と分析を中心にしながら、その点に焦点をあてつつ「信者の実態及び信者減少・脱会の原因理由」に迫っていくこととしたい。

1. 米里地区の人口変動と信者数との関連

先ず最初に、人首教会の信者減に直接つながることとなった米里地区の人口減少について見ていくこととする。以下の表は、江戸時代から現在に至るまでの、米里地区の人口推移である。ちなみに米里地区は元来は人首村、米里村と称し、昭和30年2月に合併して以降、江刺市米里地区となり、平成18年にさらに合併して奥州市江刺区米里地区となっている¹。

町35、カトリックは米里字荒町1にあったが〔江刺市1990p107〕、令和元年現在、建物は共に失われて存在しない。ちなみに人首ハリストス正教会堂は昭和8年と昭和27年2度の火事で消失し、その跡地に建てた建物を仮の教会として☒ K.S氏が管理者として住み込んでいた〔江刺市1990p107〕。人首カトリック教会堂は、信者皆無となった平成22年に老朽化のため取り壊わされている〔及川2018p30、43〕。

3 及川宏幸2018

〈米里地区の人口推移〉（表 1）

宝暦13（1763）年…2738人 ⁴
安永 2（1773）年…2910人（655戸） ⁵
明治 6（1873）年…2639人（512戸） ⁶
明治30（1897）年…3171人（522戸） ⁷
大正14（1925）年…3686人（606戸） ⁷
昭和15（1940）年…3817人（640戸） ⁷
24（1949）年…4412人（721戸） ⁷
30（1955）年…4516人（738戸） ⁷
35（1960）年…4270人（761世帯） ^{8・9}
40（1965）年…3781人（741世帯） ^{8・9}
45（1970）年…3156人（701世帯） ⁸
50（1975）年…2799人（683世帯） ^{8・9}
55（1980）年…2639人 ⁸
60（1985）年…2538人 ⁸
平成 2（1990）年…2330人 ⁸
平成30（2018）年…1314（505世帯） ¹⁰

これを見ると昭和30年をピークとして、米里地区の人口は急激な減少の一途をたどり、平成 2 年現在で昭和30年の約半分、平成30年現在で 3 分の 1 以下の人口にまで落ち込んだ様子が伺える。米里地区の中心地である人首町の住民¹¹

4 江刺市1974p69。ちなみに安永 2（1773）年頃の、江刺市中心域の片岡村（今の岩谷堂）の人口は2,785人〔宮城県1961p219〕であった。

5 安永二年「風土記御用書出」、宮城県1961p361

6 江刺市1978p611

7 江刺市1979p662。

8 江刺市企画調整課統計調査係 平成 5 年提供データ

9 ちなみに昭和35年江刺市人口は 50024人なため、米里4270人で人口割合は8.5%。昭和40年江刺市人口は 43595人なため、米里3781人で人口割合は8.7%。昭和50年江刺市人口は37358人なため、人首2799人で人口割合は7.5%となる〔江刺市1987p857、註 8 データより〕。

10 奥州市市民課発行データ H30年 9 月の住民登録月報（奥州市江刺米里地区）より。

11 平成30年10月22日、令和元年 9 月14日菊池節子さん（昭和17生）談。

談によると、平成31年現在米里の人口は1000人を少し越えるほどまで減少し、公共交通機関であるバスも、2時間に一便しか無い状態だという。昔は不便な所とは思わなかったが…と語る。この方が結婚して来た昭和39年当時の人首町は店屋も繁盛しており、かつて宮沢賢治が訪れた種山高原（米里、遠野市、住田町境）に行くバスも人首町を通り、遠野市宮守から人首町へのバスもあったそうである。さらに当時、三陸海岸の大船渡市から人首町を経由して水沢市に行くバスもあったというが今は無く、また現在大船渡市から水沢市に行くバスの経由地にも人首は含まれなくなったという。この証言から人口減に伴い、かつての人首町の商店の賑わい消失と、周辺公共交通網から人首町が徐々に外れていく様子が伺える。本稿 p87～88にあげた表10、11より、昭和30年以降に人首の教会から離れた信者が圧倒的に多い様子からもこの事はうなずけよう。

〈人首ハリストス正教会の信者数変遷〉(表2)¹²

22名	→ 85名	→ 120名余	→ 47名	→ 24名	→ 17名
(明治13)	(大正11年)	(大正末)	(昭和6～16年)	(昭和56)	(平成5)

〈人首カトリック教会の信者数変遷〉(表3)¹²

52名	→ 60～170名	→ 40余名	→ 30名余	→ 10数名	→ 6名
(明治19)	(明治41)	(大正14)	(昭和26頃)	(平成2)	(平成5)

次に上記表2、表3を見ると、人首ハリストス正教会信者数のピークは大正末、人首カトリック教会信者数のピークは明治期後半と推定される。表1「米里地区の人口推移」(p73)より、人首の人口は昭和30年をピークに減少に転じていることから、当初人首のハリストス、カトリック両教会信者の減少傾向は昭和30年以降からの、米里全体の人口減少という社会現象とリンク・連動して起きた事象であろうと想像していた。しかし以下の表4及び表2、3を見ると、明治末・大正末といった、半世紀前から信者数の減少傾向が現れていたことに

12 表2、表3 データは及川2018p37より。表4 は及川2018p38より。

なり、予想とは異なるため、以下にその理由・原因を考えてみたい。

〈人首カトリック教会 明治期受洗者数〉(表4)¹²

明治17 (4人)	明治26 (0人)	明治35 (1人)
18 (39人)	27 (14人)	36 (0人)
19 (9人)	28 (13人)	37 (0人)
20 (14人)	29 (13人)	38 (1人)
21 (9人)	30 (21人)	39 (0人)
22 (5人)	31 (11人)	40 (3人)
23 (6人)	32 (0人)	41 (3人)
24 (3人)	33 (2人)	
25 (5人)	34 (3人)	

まずこのデータはカトリック側のデータであるが〔及川2018p38〕、同時期のハリストス側のデータ・石巻伊望教会信徒領洗者の変遷〔波多野1969p385、及川2018p39〕を参考にしてみると場所は違うものの、表4と同じ傾向を示していることから、米里におけるハリストス、カトリック両教会とも同様な状況であったと推測し、以下に減少理由を推測していくこととする¹³。先ず表4で特に気にかかる時期は明治32年以降の受洗者数の減少期である。明治42年以降の洗礼者数データが確認できないため、なんとも言えないが、表2、表3の信者数変遷の関連から見てみると、明治・大正期からの信者数減少傾向理由、教会の受洗者数が減少に向かう原因としてはa時代や地域のキリスト教に対する関心興味・信仰熱が冷めたことから、他宗教（主に仏教・寺の檀家）の家が、新たにキリスト教に改宗する事例が極端に少なくなっていったこと。「封建時代から解放された明治期の熱気が一時期キリスト教への入信に向かっていたその熱気が、明治後半期以降冷めてきた影響」〔及川2018p38、39〕と想定されること。bまるで明治32年までのキリスト教に向けられた地域の熱気はさめて、この時期人首の信者のほぼ入りつくした観、地域の入信の限界数字に達した事を

13 内海1979p59には、明治21年～昭和50年までの日本ハリストス正教会受洗者数の変遷が載っている。それを見ると明治36年～明治40年と大正6年以降に受洗者数の急激な落ち込みが見られ。表2～4との時期の整合性が感じられる。

示しているようにも見え、興味深い数字であること、などがあげられる。住民であるカトリックの信者も「信仰ある人、好奇心ある人、町中の人が信者が多かったのでは。その後外に人が移って行って昭和30、40年頃に人口が減っていった¹⁴。」と語っていたのが印象的であった。もし新たな家が、キリスト教に入ることが無い場合には、1) 既存の信者の家でのみ信仰が受け継がれることになること。2) 次第に高齢者の死等による自然減が出てくるであろうこと。3) 信者家における新たな信者の獲得、つまり幼児洗礼に一層信者増が見込まれると想定される。しかし明治末から大正末にかけて表2、3 (p74) より信者数の大幅な減少が確認されることから、幼児洗礼による信者数増がうまく出来ない状況があったのでは無いかということも伺われる。しかも戦前戦後日本では戦後のベビーブームによる、子供が多く生まれる状況であったにもかかわらず人首教会では、信者数が減少傾向を示していることから、幼児洗礼での各家における何か特殊な状況があったように思われるが、それに関してはこの後の章でその点について探ることとする。また地方では高度成長期に若者の就職による人口移動現象も見られることから、人口移動という点からも信者減の実態を把握する必要があると思われる¹⁵。

2. 信者の実態

平成2年から平成5年にかけて人首各教会の信者状況聞き取りを実施したが、この章では以下にその信者情報を整理することとし、その先の目標として前章1 (p75~76) での仮説や信者減少の実態把握に迫ることとする。以下の表5、6は現在(平成5年調査現在)及び過去(平成5年調査より前)の人首ハリストスを、表7、8は現在(平成5年調査現在)及び過去(平成5年調査より前)の人首カトリック教会各信者の状況を、聞き取りや墓碑等で把握した情報を整理したものである。表には各家における幼児洗礼の状況及び家族の信者状況、

14 平成5年9月15日、故菊池十三雄さん(大正13生)談。

15 人口移動に関しては、その背景として人首の産業構造や社会変化についても探る必要があるが、今回は紙面の関係でそれらは次稿以降に記す予定である。

人首教会および信者を離れた時期、信者の職業、各信者の米里地区における分布状況、信者の転出状況を記してある。この表をもとに、聞き取りに基づいた信者の米里からの転出、教会からの転出の理由等を探っていききたい。なお（平成5年現在の信者）は平成5年現在の人首ハリストス、カトリック両教会の信者であり、（昔の教会信者）は平成5年現在、既に両教会信者ではなくなった方々という意味である。このデータを作成した平成5年当時から26年後の令和元年現在、人首教会の信者は両教会併せて人首ハリストス正教会の1名のみになり²、その他全ての信者は物故されたか、又は子供のもとを頼って他の地に転出された様子である。この表では平成5年現在で現在信者か、過去信者かを区別して記載整理してはいるが、さらに両表には平成30年及び令和元年現在の情報も加味して整理を加え、令和期までの信者の推移を見ることが出来るようにしたが、現信者及び旧信者の区分は平成5年現在としたためご注意願いたい。また以下の表は一部の信者からの聞き取り情報のため、正確か不安な面もあるが、傾向を把握する目的のためあえて整理したものである。

〈ハリストス（平成5年現在の信者）〉（表5）

※表5は『盛岡・盛ハリストス教会管轄教会信徒名簿』（1981）に記載されている信者名を掲載したもの。その情報に、平成2,5年調査及び平成30年、令和元年調査時聞き取り情報を加味し製作した。表中のH5は平成5年、R1は令和元年を示す。

※信者年齢は一部信者からの聞き取りのため正確でなく、数年の誤差があるが、墓碑銘で正せるものは極力訂正してある。

※表5現在の信者太字丸ゴシック体の11名は平成5年現在、米里に住んでいる信者を示している。

※信者は6戸。うちCが本家でDがCからの分家。ANPはCの親類である^{11, 16}。なおS家も複数戸信者が見られ、K家が本家でEG家が分家である〔米里公民館 p19〕。

※人首ハリストス教会の役職は執事長（教会信者の代表者）がC K.C、執事（会計兼ねる）がD K.NとE S.H、管理者はA K.Sとなっている。任期はあって無い¹⁶〔江刺市1990p 107〕。

16 平成2年8月15日、平成5年11月7日 故 菊池修行（明治43年生）さん談。

名 前	生没年月日	職 業	その他
A 父 K.S 長男 長男妻 長男息子 長男娘 次男 次男妻 (住所 人首町上町)	明43～平18 昭20～平22 昭22～ 昭45～ 昭49～ 昭23～ 昭31～	元郵便局員 会社員 (江刺) 公務員 (岩谷堂)	
※子供人首外 (江刺・岩谷堂) に出た例。 ※明治23年布教委員10名の中の菊池亀三 (歳?) 子孫と推定される [及川2018 p26] [墓碑銘 R 1 調査]。 ※没家族全員信者 [墓碑銘 R 1 調査]。☑家親類。 ^{11, 16}			
B 夫 K.C 妻 子 子妻 (住所 人首町上町)	明41～平2 大5～平13 昭11～平21 昭17～	郵便局長代理 郵便局長代理 令和元年現信者	
※子供人首外 (水沢等) に出た例。 (H 5) 家族全員人首教会に所属。 (R 1) 妻のみ人首、子供は人首外 (水沢等) に居住。信者であった長女は結婚して婚家の檀家に、長男家族は岩谷堂教会所属。 ※ B の K.C 父の代に☑家から別家した家。 ^{11, 16}			
C 夫 K.C 妻 息子 (人首町上町)	大元～平13 大4～平10 昭24～	郵便局長	盛岡在住
※子供人首外 (盛岡方面) に出た例。 (H 5) 夫婦のみ人首に、子供は人首外 (共に盛岡方面) に居住。娘は非信者の様子。息子が人首教会所属。 (R 1) 父母没。子供は人首外 (盛岡方面) に居住し人首の家空き家。 ※☑家は戦前味噌醤油製造し ¹¹ 、☑K.Cは戦後郵便局局長、市議員も務めた。 ※明治23年布教委員10名の中の菊池金五郎子孫の家 [及川2018p26、墓碑銘 R 1 調査]。 ^{11, 16}			

㊦夫 K.N 妻 息子 (人首町上町)	昭4～平18 昭6～ 昭33～	元郵便局長	盛岡在住
※子供人首外（盛岡方面）に出た例（定年退職後一時帰宅中）。 （H 5）夫婦のみ人首に、息子は人首外（盛岡方面）に居住。 （R 1）信者の父没。妻は非信者の長女（宮城県東松島）へ。信者息子定年退職後人首に一時一人住む（盛岡から）。 ※没家族全員信者（墓碑銘 R 1 調査）。 ※㊦夫の父時代に㊧家から別家した家。 ^{11, 16}			
㊧夫 S.H 妻 子 子妻 子息子 (人首町下町)	大9～平23 大12～平27 昭24～ 昭23～平29 昭48～	農家 公務員 会社員	
※信者の父母没。子供人首外に出た例（岩谷堂）。 （H 5）夫婦のみ人首に、子供は人首外（岩谷堂）に居住。 （R 1）父母没後、子供は人首外（岩谷堂）に居住し人首に家無し。 ※家族全員が信者の様子（墓碑銘 R 1 調査）。㊨家の分家〔米里公民館 p19〕 ※父母没。子、岩谷堂に住み岩谷堂教会に所属。 ^{11, 16}			
㊨妻 K.R (荒町)	明38～平21	元教員	
※子供荒町外（仙台、青森方面）に出た例。 （H 5）夫没後妻のみ荒町に、非信者の子供は荒町外（仙台その他）に居住。 （R 1）自宅は無住。子供達は荒町外（仙台、青森県）。長男はカトリック信者に。 ※墓碑銘に大正13年から全埋葬者に洗礼名の記載あり。大正期からの信者の様子（墓碑銘 R 1 調査）。 ※『人首正教会教會日誌』明治43年9月23日項に「日下5名の外聖洗の式あり」との記述あり。㊨家はこのときに洗礼を受けたものと想定される。 ^{11, 16}			

〈ハリストス（平成5年現在、昔の教会信者）〉（表6）

※表6は信者からの聞き取り（H2～H5年、H30、R元年）によって作成したもの。

	名 前	職 業	去った時期	理 由
信者没後檀家 に変わった例	㊄ S.B(男) (～昭8没) (人首町下町)	不明	㊄ S.B 没後、㊄ 家は寺の檀家となる。	信者の死
	※（H5）人首に家現存し、昭和初期に家族の信者没後、寺の檀家になった例。 ・昭和8年没〔墓碑銘 R 1 調査〕の㊄ S.B がハリストス信者。 ・明治6年、31年、大正7年生まれの家人が仏式で葬式をあげているため、㊄ S.B 以外は信者はいなかった様子。㊄ 家の分家〔米里公民館 p.19〕 ・平5 現在人首に家現存。 ^{11、16} ・S.B か孫かが赤金鉱山勤務。 ¹⁷			
	㊄ 父 O.C (～昭16) (人首町下町)	鍛冶屋	㊄ 父 O.C の没後、戦後に檀家となる	不明
	※人首に家現存（H5 現在）し、戦後寺の檀家になった例。 ・戦前無くなった家人5人の墓碑銘には戒名は無く俗名で記載。㊄ O.C と妻、子供は信者〔㊄ O.C の子供 K を除く〕。戦後（昭和49年前後）K を含む K の家族全員寺の檀家となる。 ・明治23年布教委員10名には O 姓が見当たらず、後年信者になった家か。 ^{11、16}			
カトリックへ	㊄ 妻 K.K (住所不明)	不明	平成元年	
※代々ハリストス信者の家。K.K はカトリックで葬儀をあげた。夫はハリストスからカトリックに移る。子孫は盛岡へ。 ¹⁷				
信者没後、 家族は他の土地へ	㊄ S.? (荒町)	不明	昭和23年頃。	夫の死後、妻と娘が昭和23年以降江刺の愛宕に移る。
	（H5）昭和23年頃、他の地（江刺市の愛宕）へ移住。家は消滅。 ¹⁶			
	㊄ 夫 S.K (～昭48没) (人首町下町)	呉服商	㊄ 夫 S.K とその妻没後の昭和49年以降教会離れる。	

17 故 菊池長兵衛（大正元年生）さん談

信者没後、家族は他の土地へ	※子供人首外（東京、北上市）に出た例。 ^{11、16} (H 5) ㊧ S.K 夫婦(呉服商)没後、子供は人首外に居住し人首教会離れる。 ¹⁶ ※明治23年時の布教委員10名の佐賀文三郎家〔及川2018p26〕末裔〔墓碑銘 R 1 調査〕。 ㊨ ㊩ 家の本家〔米里公民館 p19〕			
	㊬ 妻 C.T (大10～) (人首町上町)	不明	昭和36年頃夫没後、妻であるC.T教会を離れる。昭和62年頃子のいる千葉へ。	
	※子供のもとに人首を出て家消滅した例（千葉県住）。 (H 5) 夫没後、昭和の終わり頃妻は子供（千葉県）のもとに人首を出て教会離れる。 ¹⁶ ・明治23年時の布教委員10名に C 家なし。それ以降の信者か。			
	㊭ 夫 K.T (～昭44. 6) 妻 (～昭44. 5) (人首町上町)	文具店	夫 K.T と 妻 没後、昭和58年頃洗礼を受けていた息子は他の土地へ。 ¹⁶	
	※子供人首外に出た例。 (H 5) 夫婦没後、子供は人首外に居住し人首教会離れる。 ^{11、16、17}			
	㊮ K.M (女) (明43～昭49) (人首町下町か)	家は昭和の初めは呉服店。戦前は郵便局長した者あり。	昭和49年以降子供は石巻へ。	
	※子供人首外に出て家無人になった例（宮城県石巻住）。 (H 5) 子供は人首外に居住し人首教会離れる。 (R 1) 明治23年布教委員10名のうちの菊池登根〔及川2018p26〕の子孫と想定される家〔墓碑銘 R 1 調査〕。 ^{11、17}			
	㊯ M. T (男) (住所不明)	教会の管理	昭和13年頃	㊰ M. T の死後妻仙台へ。
M.T の墓米里の寺に残る (H 5 現在)。 ¹⁷				
㊱ 夫 K.R (大 8 ～平25) 妻 (昭 2 ～平22) 長男 (昭23～) 次男 (昭25～) (人首町上町)	公務員 会社員 会社員 自営業	人首の土地を貸して昭和56年現在、K.R 夫妻、長男家、次男家は他の地（水沢、江刺）に住む。		

信者没後、 家族は他の 土地へ	※信者人首外に出て家無くなった例（岩谷堂住）。 (H 5) 一家人首教会信者、土地を貸して移住し、長男と次男家族は昭和56年現在岩谷堂教会に所属。 (R 1) 昭和39年以前に家族そろって人首外（岩谷堂）に居住 ¹¹ 。岩谷堂教会の信者。次男が岩谷堂教会信者。次男は岩谷堂ハリストス正教会の管理役。 ※明治23年布教委員10名の内、菊池熊太郎〔及川2018p26〕子孫の家で、没家族は全て教会信者〔墓碑銘 R 1 調査〕。 ¹¹			
	〇 Y.R (男) (文政2～明20) 家人 Y.Y (~明31) (住所不明)	不明	不明	不明
不 明	(H 5) 明治20、31年没墓碑銘 (〇 Y.R、家人 Y.Y) あり。 明治23年10月の布教委員10名中に八巻孫四郎〔及川2018p26〕の名有り。この家族か。 (R 1) 墓石見つけられず。 ※人首に Y という名字の人はいない ¹¹ 。平成2年現在のゼンリン地図にも Y の名は探せず。			
	〇 S.? (住所不明)		大正初	不明
	※ (H 5) 不明 (R 1) 不明 ¹⁷			

〈カトリック（平成5年現在の信者）〉（表7）

- ※表7太字丸ゴチック体の5名は平成5年現在、米里に住んでいる信者を示している。
- ※信者名簿は未見のため、平成5年現在米里在住の信者名のみ記したものを。他地区に住む表7信者の家族名は不明のため省略の形。
- ※信者年齢は一部信者からの聞き取りのため、墓碑銘で正せるものは正してある。
- ※平成2年当時信徒会代表者（人首・水沢教会含む）は① U.I。平成5年現在人首の教会管理者は② K.Tである〔江刺市1990p107〕。

名 前	生没年月日	職 業	そ の 他
① U.I (女) (荒町)	大4～平15	元教員 市教育委員など	

※米里生まれ。母のみ熱心なクリスチャンだが父は信者でない。UI 本人含む 6 人兄弟全て幼児洗礼。H 2 年当時信徒会代表者。夫は寺の檀家。夫の反対で UI 子供には幼児洗礼を受けさせず ¹⁸ 。			
②夫 K.T 妻 (本小路)	大13～平20 昭2～平18	元農協職員	
※ K.T 家は元々檀家。クリスチャンの K.T 母が嫁入り後、父反対はあったが子供 5 人すべて幼児洗礼。K.T 父は檀家のまま。K.T 妻も結婚後洗礼。子供は無し。 ^{18, 19}			
③夫 I.K 妻 (人首町下町)	昭4～平27 昭12～平? 没	自営業 (雑貨商)	幼児洗礼。 結婚後洗礼
※両親と I.K 含む兄弟 5 人信者〔墓碑銘 R 1 調査〕。妻は結婚後洗礼。I.K 子供は未洗礼で盛岡と北海道に住む。 ^{18, 19}			
④ S.T (女) (人首町下町)	大14～平28		
※ S.T 父は床屋。S.T 父母は信者。S.T 含む五兄弟中 2 名は信者〔墓碑銘 R 1 調査〕。その他信者でない S.T 兄弟 3 名は 10 才前後の幼少期に亡くなる。S.T は幼児洗礼の様子。S.T 子供は未洗礼の様子。S.T は平成 5 年現在子供のいる盛岡に住むが、教会の大きな行事の際には人首に来る。最初の人首カトリック信者佐藤宗治家〔及川2018p29〕の子孫か。人首自宅は人に貸す。 ^{18, 19}			

〈カトリック（平成5年現在、昔の教会信者）〉（表8）

※表8は信者からの聞き取り（H 2～H 5 年）によって作成したもの。

	名 前	職 業	去った時期	理 由
信者家族没後檀家に	⑤ W.A (男) (～昭57) (人首町上町)	不明	昭和57年以降	信者の W.A 没後檀家に。W.A の死後家族に信者なし
	※人首に家現存し、家族信者没後寺の檀家になった例。 (H 5) 昭和57年に信者の W.A 亡くなり、以後檀家に。それ以前の家族は全員信者 (W.A 母のみ未信者)。W.A 妻と子供 3 人は未信者。 ¹⁸			
他の土地へ転出	⑥ W.T (女) (明35～平7) (荒町)	教会管理	W.T 夫亡き直後に昭和58年老人施設入所のため荒町を離れる。	

18 平成2年8月19日、平成5年11月6日故 薄井磯さん（大正4生）談。

19 平成5年9月15日、故 菊池十三雄さん（大正13生）談。

他 の 土 地 へ 転 出	※信者荒町外に出た例（水沢）。 （H 5）夫婦で教会の管理者。夫の死後老人ホームに転出（水沢） ¹⁸			
	⑦ ?.M (男) (荒町)	不明	大正期	不明
	※信者荒町外に出て家無くなった例 （H 5）大正期他の土地へ移住。 ¹⁸			
	⑧ A.? (住所不明)	旅館	大正末～昭和3 年頃に仙台へ転 出。	
	※信者米里外（仙台市）に出て家無くなった例。 明治期教会発展の尽力者阿部幸左エ門（明治18年受洗〔水沢p 3〕）の子孫。 墓地には阿部幸左エ門（明治42年没）、阿部千鳥（大正13年没）、阿部文弥夫 婦の墓等見えるため、家族で信者の様子〔平成6年墓碑調査〕。 ¹⁸			
	⑨ WT (住所不明)	元村長	不明	他の土地へ転出 か不明。
	※信者米里から転出し家無くなった例か（直近調査で米里に家あり判明）。 （H 5）父である WT が非信者、その他の家族は信者。 ※① UI の生家。父は非信者、母が熱心な信者で6人の子供は幼児洗礼。 ¹⁸			
	⑩ C.H (男) (人首町下町・本小路)	不明	昭和53年頃に人 首を離れる。	
	※信者人首から転出し家無くなった例。 （H 5）③ I.K 家の親戚。C.H の妻、息子、孫一人が信者。息子妻と孫2名は 洗礼受けず。昭和53年に人首を離れる。 ¹⁸			
	不明	⑪ M.? (住所不明)		¹⁸

3. 信者減少の原因理由を探る

3.1 信者表5～8の整理

以上、表5～8（p77～p84）の平成5年調査現在のハリストス、カトリック両教会信者、元信者データで気がついた点を整理し以下に列挙したい。

(1) ハリストス、カトリック共通事項

共通事項としては、Ⅰ) 表5、7（p77、82）の平成5年調査現在のデータでは平成5年当時、米里在住の両教会の信者の平均年齢（ハリストス71才ほど、カトリック67才ほど）の高さが目立つこと〔表5、7より〕。Ⅱ) 両教会の信

者及び元信者は、米里地区のうち人首・荒町・本小路と称する町部（半径300[㊦]程の範囲内）にほぼすべての信者が集中していること²⁰。

(2) ハリストス信者の場合

以下にいくつか気づいた点を列挙すると、Ⅲ）表5、6（p77、80）より、K家S家に見られるように信者に親類関係の傾向が見られること。たとえばCが本家でBが分家。ANPはCの親類というように。S家もK家が本家で、EG家が分家である〔米里公民館 p19〕。次にⅣ）ハリストス旧信者の場合、表6（p80）を見ると檀家に変った2軒は信者家人が共に戦前に亡くなり、その後子供の家族が檀家になったもの。つまり個人信者の場合と考えられ、家あげての信者で無かったことが原因か（GHの例）。又はI家の場合、家族信者であったものが後に個人信者に変ったものか。Ⅴ）平成5年現在現存のハリストス信者の場合、表5（p77）より夫と妻、親と子というように、家族単位・家族全員で信者を構成している傾向が見られるが、しかし子供達の代になると非信者の傾向が見えること（C家の娘、Dの長女、Fの子供）。また信者である娘は婚家に入るためか、非信者となる場合があること（B、C）。Ⅵ）ハリストス昔の教会信者の場合表6（p80）より、不明事例2例除く8事例IJKLMNOPの全ての子供が人首外に移住したことで人首教会を離れ、その後家が米里に無くなった事例であり、数が多い事がわかる。Ⅶ）平成5年現在、現存するハリストス信者の場合も表5（p77）より、戦後生まれの子世代の信者は全て人首を離れて仕事を見つけ、人首以外の地に住んでいる。そのため人首教会の信者の激減を招く結果となった様子が伺える。

(3) カトリック信者の場合

以下気づいた点は、Ⅷ）カトリック昔の教会信者の場合、表8（p83）より信者が米里外に出て家が無くなり、結果人首教会を離れた例が、不明事例を除いた5事例中4事例見える（⑥⑦⑧⑩）。Ⅸ）カトリック昔の教会信者の場合、表8（p83）より妻と子供が未信者であったため、一家信者であった家が信者

20 住所が判明している事例からのみ勘案。ちなみに旧信者一軒（J）のみ半径400[㊦]範囲内。

家人没後檀家になった事例が一つ見える (⑤)。X) 表7 (p82) のカトリック平成5年現在信者の場合、**幼児洗礼で信者になった傾向**が見られること (4例中①②③④)。しかしその幼児洗礼で信者になった者の子供たちの代は、**幼児洗礼は受けさせていない傾向**が伺えること (4例中①③④)。

3.2 信者が人首教会から離れた理由を探る

以上の現旧信者表5～8より、人首教会から離れた理由をもとにさらに整理してみたのが以下の表9である。聞き取りと墓誌とで確認出来たもののみで分析してみた。

〈平成5年現在既に人首教会から離れた信者(令和元年調査情報込み)〉(表9)

ハリストス			
6軒	／	12軒	┌
(H5現在信者)		(H5確認出来る昔の信者)	├ ①檀家へ2軒 17%程 (12軒中)
33%程 (18軒中)	／	67%程 (18軒中)	├ ②カトリックへ1軒 8%程 (12軒中)
			├ (その後他の土地へ転出)
			├ ③他の土地へ転出7軒 58%程(12軒中)
			├ ④不明2軒 17%程 (12軒中)
カトリック			
4軒	／	7軒	┌
(H5現在の信者)		(H5確認出来る昔の信者)	├ ①信者没後檀家へ1軒 14% (7軒中)
36% (11軒中)	／	64% (11軒中)	├ ②他の土地へ転出4軒 57% (7軒中)
			├ ③不明1軒 14% (7軒中)

さて表9 (p86) の数字を見ると、本来いた教会信者の6割程が現在 (調査時の平成5年当時) までに、人首教会から離れていったことを示している (教会から離れた率は、ハリストス67%、カトリック64%)。さらに人首教会から離れた事例に絞り離れた理由を探ると、米里から他地区への転出に伴う理由で人首教会を離れた事例が際立つ。その割合はハリストス66% (転出例表9の②③を合計した数字で、教会を離れた12軒中8軒)、カトリック57% (表9の②で教会を離れた7軒中4軒) に及び、平成5年までに教会を去った信者軒数の6割を占めているのが特徴的である。ちなみに教会を去った理由不明事例を分母から差し引いた値で見ると、平成5年確認出来る昔の信者のうちハリストス80% (10軒中8軒)、カトリック66% (6軒中4軒) と7割ほどが人首転出に伴うものということになる。

3. 3 教会信者減少は米里地区の人口減少とリンクするか。

以上信者数減少の7割ほどが、米里からの他地区転出という理由が見られたことから次に、米里地区の人口推移と信者転出との関連、及び信者転出時期の推移を見てみたい。表1 (p73) より、米里地区は昭和30 (1955) 年の人口4516人 (738戸) をピークに、昭和50 (1975) 年2799人 (683世帯)、平成2 (1990) 年2330人と、地域人口の急激減少を示し、昭和30年から平成2年までのわずか35年間で人口が半減するほどの過疎化に見舞われている。以下の表は、表5～8 (p77～p83) をまとめて信者転出時期を見るために一覧表にしてみたものである。

〈教会・米里から信者が去った時期 (H 5 まで)〉 (表10)

※表の見方…例 K (S48以前 / 人首町・呉服店)

表5～8の信者記号 (教会を離れた時期 / 居住地域・職業)

※教会を離れた時期に関しては、T…大正、S…昭和、H…平成の略称を用いた。

大 正	戦 前	戦 後	S30～H5
R (T初 / 不明)	G (S8 / 人首町・鉱山か)	J (S23頃 / 荒町・不明)	P (S39以前 / 人首町・公務員)
⑦ (T / 荒町・不明)	O (S13頃 / 不明・教会管理)		K (S48以前 / 人首町・呉服店)
⑧ (T末 / 人首町か・旅館業)			H (S49以前 / 人首町・鍛冶、公務員)
			N (S49頃 / 人首町・呉服店、郵便局)
			M (S58頃 / 人首町・文具店)
			L (S62頃 / 人首町・不明)
			I (H 1 頃 / 不明)
			⑤ (S57頃 / 人首町・不明)
			⑥ (S58 / 人首町・教会管理)
			⑩ (S53頃 / 人首町・不明)
			④ (H 5 前 / 人首町・床屋)

〈教会・米里から信者が去った時期 (H 6～R 1 まで)〉 (表11)

大 正	戦 前	戦 後	H6～R1
			C (H13頃 / 人首町・製造業、郵便局)
			① (H 15 頃 / 荒町・教員、議員)
			A (H18頃 / 人首町・郵便局)
			② (H20頃 / 本小路・農協)
			F (H21頃 / 荒町・教員)
			E (H27頃 / 人首町・農家)
			③ (H27頃 / 人首町・雑貨商)

※表に不明事例の Q ⑨⑩は含めず。㉔（人首町・K.Cの家族・子妻）は人首町にいる信者。㉕（人首町・K.Nの家族・息子）は定年後令和元年頃に人首に一時単身で戻ってきた信者。共に表10、11には加えていない。

本稿の主たる調査データは平成5年までのため、平成5年までの17事例（表10、p87）の他、令和元年までの7事例（表11、p87）を加えた計24事例を2つに分けて表を作成したもの。先ず当初予想としては、人首教会から他地区に転出する信者が、昭和30年以降に集中するのではと考えられた。そこで教会転出者の時期を上記表10、11（p87）で確認すると、1）大正期13%（24例中3例）、2）昭和初期から戦前まで8%（24例中2例）、3）戦後から昭和30年まで4%（24例中1例）、4）昭和30年から平成5年まで46%（24例中11例）となりこの時期が際立つ。そして5）平成6年以降から令和元年まで29%（24例中7例）となる。昭和30年～令和元年に限って教会を離れた割合を見ると75%（24例中18例）にも及び、当初の予想通り米里地区の人口減少とリンクする形で、両教会の信者数減少が加速していった様子が伺える。この昭和30年～令和元年に教会を離れた18例を見ると、昭和39年～昭和62年までの23年間で9例、平成元年～平成27年までの26年間で9例と、同じペースでの減少傾向が見られる。

3.4 人口が減少を示し始める昭和30年より以前に地区を転出した事例について。

次に注意したい点としては、24例中6例の信者が、米里の人口が減少を示し始める昭和30年より以前に、地区を転出したことである。この数字は分母が小さいためなんとも言えない面があるが、昭和30年以降の地区大量流出の前段階の兆しとして、人口上昇に向かう戦前期から既に人首では信者の転出がはじまっていたのではないかと疑える面も垣間見られるため、以下にその要因・背景について少し取り上げてみることにしたい。前記表10（p87）の通り昭和30年以前に米里を去った信者は、確認されるだけで6事例ある。古い信者のため、職業が何であったのか不明な事例が多いが、判明している3事例は旅館業、教

会管理、鉱山などである。その他居住地判明例は6事例中4例であり、全てが米里地区中心地に位置する人首町か人首町に隣接する荒町である。信者らが昭和30年より前に米里を去った、考えられる理由ははっきりしない。しかし現段階でこの背景をいろいろ想定してみると米里地区の、昭和30年の合併に伴うこの地区の周辺地化以前に、すでに進行していた地域主要産業である鉱山の縮小化、地域交通体系の変化、産業構造変化にともなう物資集積地としての役割喪失、地域商圈の変化と地域商業活動の縮小化等、地域の“社会的・経済的な要因”がいろいろ想定される。それに関しても分析を試みたが、紙面の関係でそれについては次回以降に回し、以下米里地区の急速な人口減少及び信者減少につながる要因・背景の解明を記す事としたい。

4. 信者の分布



図2. 大正14年頃の人首町の様子。右上奥山側に教会が見える。〔岩手県教育会『江刺郡志』より〕

表5～8 (p77～83) を見ると、一定の地域に極端に信者の片寄りが見られるため、平成5年調査以前に教会を離れた過去の信者分布も含めて、一項として取り上げて見ていくこととする。

表5～8 (p77～83) を見ると、ハリストス、カトリック両信者は29例中、人首町15例、荒町5例、本小路2例、不明7例（不明例のうち旅館業1例、教会管理1例は町中と想定される）と、米里中心部に位置する3地区（半径300～400m程度の範囲内）に集中しているのがわかる。この3地区は江戸時代人首城（正式には人首要害）の周辺を囲む形で形成された集落であり、荒町・本小路は江戸時代の領主沼辺氏の家臣が住居とした武家屋敷の区域。その荒町・本小路に隣接する人首町は、街道流通の交通拠点となった町人町の区域で、明治期以降には米里村と周辺区域の物資及び、海と内陸を結ぶ物資の集積

する中心街となった。また人首町²¹は昭和期平成期を通じて米里地区の中心地区、駐在所や郵便局などの公共機関の所在地であり、住居・商店等が密集する場所でもあった。ちなみに平成5年当時、訪れるたびに住民に聞き込みをしたが、米里の町部以外の農村部には信者は見あたらず、過去においても見つけだすことは出来なかった。以上の事から米里におけるキリスト教は町部の、都市型の宗教とすることが出来るようである。このことは同時に信者の職業にも当然反映されてくると予想されるため、そこで前章に上げた表5～8（p77～83）から各家当主の信者職業を探ってみると、表掲載の信者29名中公務員8例（郵便局4例のうち製造業からの転業1例含む、みなし公務員も含む）、商店主5例（呉服商、雑貨商、旅館業、文具商）、職人2例（鍛冶、床屋）、教会管理者2例、団体職員1例、農家1例、不明10例（1例は鉾山かも²²）となる。以上不明事例を除いた19例で見ると、農業を営んでいるものは1名のみで、残り18例が都市型の業種、町部に関係した仕事である事が伺える。米里の二つの教会は人首の町部にあったため、結果的に信者が町部に遍在したのとも考えられるが、実はそのことがp73に述べた米里地域の人口減とリンクして、結果的にその後の信者の急激な減少につながったとも考えることができよう。次に、教会及び信者が集中する米里の中心地である人首町（信者が集中している人首町、荒町、本小路の3地区中、最も人口の多い人首町）はどのような雰囲気のある街であったか、それを以下に探してみたい。昭和39年に、隣接地域から米里に嫁いできた住民によると、地図には記載が無いが、人首町は住民の意識の上で

21 ちなみに人首ハリストス教会は人首町の上町側に（地元民によると人首町は上町と下町に分かれているという）、人首カトリック教会は荒町の、人首町上町境に建っていたが、ともに現在建物は失われて存在していない。

22 現信者及び過去信者に鉾山従業者は不確定だが1例のみであった。しかしながら故 薄井磯さんよると「村長をした父の話では、明治年間栗木鉾山の人などが信者として来ていた。鉾山には福井県とか全国あちこちから来ている人が多くいた。」というようにかつて信者に鉾山労働者がいたという証言を聞く。人首ハリストスの最初の信者菊池秀三郎〔米里公民館p24〕及び人首カトリックの最初の信者佐藤宗治は明治7年連名で、人首村鉾山の税金納付の件で県に書類を提出している関係から〔江刺市1979p146〕、ともに地区の有力者、人首鉾山関係の代表者である様子が伺える。その関係から鉾山従事者に信者がいないとも限らない様子が伺える。また地域の有力者が明治初期にキリスト教信者となったのではないかとこの想像も湧く〔及川2018p25、29、41〕。

は上町^{かみちよう}と下町の二つに分かれているという。現在では無いが、かつて上町の人には旦那さんの気質があり、寄付金もけっこうもらえるような地区であった。他方、下町は長屋があるというようなちょっと対照的な地区に見えたという。話者生家のある隣村の玉里地区はあまり貧富の差が無い農村地区だったが、嫁に来た人首町は貧富の差が激しいのには驚かされたという。いい家はすごく良く、そうでないところは長屋に住んでいる人もいるといった具合である。上記話者の夫（人首町生まれ）によると、人首町は色々な人が代わる代わる入って、そっちこちに長屋があるような所であったという¹¹。またある住民の話では「（人首町の）上町は旦那様が多く、時に問題をお金で解決する人もいたので私は少しいやだった。」とも語り、普通の農村地帯とは異なる貧富の差の存在や、他地区から人が入り込み、金回りの良い状況が見える人首町の、今では見られなくなったかつての様子や当時の街の一端が伺える。このような、人も集まり物やお金も集まり回る所であった人首町。その人首町が位置する米里地域の人口が昭和30年から平成2年までの間に半減することとなる。その急激な人口減少が地域の中心地である、人も物もお金も集まる人首町とその周辺地域に、甚大な影響を与えた事は想像に難くない。信者の生活基盤であった商業基盤の崩壊が、ひいては中心街である人首町の衰退とともに信者の急激な減少に直結していったことも想像に難くないと思われる。

5. まとめ・考察

次に前記「1. 米里地区の人口変動と信者数との関連」～「4. 信者の分布」に至るまでのデータを整理してまとめ、考察としたい。先ず信者の減少につながる要因として以下に「人口減少」と「信仰の継承がうまく出来なかった」の2点について注目し考察してみることにする。

5.1 米里における信者減少の1つ目の要因整理…人口減少（過疎化）

以下に前掲データをもとに、気がつく点を箇条書きの形で列挙してみたい。

- ① 両教会信者は米里中心部（半径300^m程度の範囲内）に集中している（II p85）。

- ② 両教会現旧信者のうち公務員（多くは郵便局）・商店主・教会管理・団体職員の占める割合が戸主の19名中18名で95%（不明事例11例を除く）にも及び、都市型の業種や商業活動に関係している信者が多い（表5～表8、p90より）。
- ③ ハリストス昔の信者の例（表6、p80）では、不明事例Q、Rの2例以外のI、J、K、L、M、N、O、P事例が、子供が米里外に移住しその後父母が亡くなるか親が子供の元へ転出するに及び、家が米里に無くなったことで人首教会を離れた例である（VI p85）。
- ④ ハリストス現信者の例（表5、p77）でも、戦後生まれの信者は全て就職で人首を離れたため、その後の人首教会の信者の激減を招く結果となっている（VII、p85）。
- ⑤ カトリック昔の教会信者の例（表8、p83）でも、信者が米里外に出て家がなくなり、結果人首教会を離れた例が不明事例、檀家になった事例を除いた5事例中4例（⑥⑦⑧⑩）見られる（VIII、p85）。
- ⑥ 表5～表8、9より、平成5年度までに教会を去った理由を探ると、不明事例を除いてハリストス80%（10軒中8軒）、カトリック66%（6軒中4軒）と7割ほどが米里転出に伴うものである（p86）。人首教会の信者減の最大の原因が、転出つまり他の土地への信者の流出現象がその根本の原因といえる。
- ⑦ 表5～表8、10、11より、昭和30年～令和元年と時期を延ばして、教会を離れた割合を見ると75%（24例中18例）（p87）。
- ⑧ 平成5年調査現在のデータで、両教会の信者の平均年齢の高さが目立つ（ハリストス71才前後、カトリック67才前後（p84）。これはおそらく、若者が外に出て、高齢の信者層が米里にのこされた現状を意味するものであろう）。
- ⑨ 平成5年当時米里に住んでいたハリストス、カトリック両信者のうち、現在（平成30年）米里に住む信者は一人だけである（p78、子妻）。その他の方々は自然減や社会減（26年間のうちに物故されたり子供の元に去ったりした）

で減少したものである。

- ⑩ 米里地区の人口は急激な減少の一途をたどり、昭和30年をピークとして、平成2年現在（2330人）で昭和30年（4516人）の半分ほどの人口にまで落ち込んでいる（表1、p73）。さらに平成30年現在の米里の人口は1314人であり、昭和30年当時の三分の一を下回った状況にまで達してきている。このことは、昭和30年以降の教会信者家の転出状況（表10、p87）と、地域の人口減少傾向（表1、p73）とがリンクしている状況が伺える。

以上前掲 p92①～⑩を整理し考察してみると米里の以下の状況が透けて見えてくる。①より、商業活動の中心部である町部に信者が集中していることから、地域を半減（平成2年現在）から三分の一以下（平成30年現在）にするほどの“人口減少”（⑩）に見舞われた米里・人首町にとって、商業関係に従事する信者（②）にとっては昭和30年以降、家業及び家の生存を危うくする事態、つまり人首の中心部商店街に多大な影響ダメージ“経済的な波及”（＝購買力の減少、販売力の低下、人首町の経済的基盤の弱体化、商店街の縮小化、新しい労働力を受け入れる素地の無い状況）を及ぼしたであったと想定される。そして⑤⑥よりその後、米里中心町からの転出“人口の加速度的な流出”が目立ち始め、加えて③④より家業跡継ぎ層の、米里外への就職及び転出“後継者層の転出”状況が加速していった構図が想定される。そして必然中心町である商業地（①②）からの転出は、教会信者の激減を示す⑥の結果（平成5年現在）をもたらし、⑧にみるようなその後の教会信者の高齢化を招いていく。つまりこのようにして信者は米里に残る年老いた父母のみとなり、その後次第次第に年をとっていく。そして連れ合いのどちらかを無くした場合、子供のもとへと一人また一人、人首を後にする③例が見られる。これが人口減、さらには“信者数の激減”（さらには信者・教会の消失）にも結びついていくこととなった（⑦）。そしてその結果、最初の調査時から25年後の平成30年、両教会含めて信者一人という⑨の結果“教会の消滅”をもたらすに至る。その状況は既に平成5年当時の信者も予見しており「転出などや人口の自然減の為に減った¹⁶。」「人首には会社・工場が無い過疎地で、子供が生まれても、他の土地に行く人、流失す

る人がいるので¹⁶。」「時代の趨勢。若い人の流出。入ってくる人がいないので増えようがない¹⁸。」というように既に当時の信者証言からも、米里地区の置かれた厳しい状況をうかがい知る事が出来る。

5.2 米里における信者減少の2つ目の要因整理…信仰の継承がうまく出来なかった側面

(1) 家族単位・家族全員での洗礼から個人の意志による洗礼へ。

表5 (p77) のハリストス平成5年現在信者A B C D E、表7 (p82) のカトリック平成5年現在信者①②③④信者とも夫と妻又は親と子というように、家族単位での洗礼事例が多く、以前は子供が幼児洗礼で信者になった傾向が見られ、家族まとまって信者を構成していた様子が見られる。しかしその後、ハリストス平成5年現在信者の表5 (p77) C (娘)、D (娘)、F (息子) の代になると非信者になる傾向が見られるようになる(カトリック平成5年現在信者表7p83の4例中③④も同じ。カトリック昔の教会信者表8p84の⑩も同じ)。また夫婦のうち片方が信者であっても、他方の反対等により子供に幼児洗礼がなされず、その後信者である家人の没後にその家族は教会から離れるといった事例が複数見られた(事例G H ③④)ため、家族ごと信者であっても個人の意志によって教会を離れて以降次第に非信者になっていく側面がひとつ見える²³。

(2) 教会側も個人の意志を尊重した洗礼へ。

もう一つは家庭だけの責任では無く「昔は幼児洗礼をしたが、現在は幼児洗礼は教会でもしなくなっている。現在は勉強をした後に、本人の意志を確認した後でないと信者にしないのではないか。¹⁹」との信者の証言にもあるように、幼児洗礼に関する教会側の対処も二つ目の要因としてあげられよう。そのため最近のキリスト教の特性からか、幼児洗礼をさせず、大人になってから判断させるという方針の家も見られ、後その家でのキリスト教の信者数が先細りする

23 信者でない子供たちについては、本稿ハリストス(平成5年現在信者)表5(p79)のFの子供は息子で、B C Dの非信者の子供は全て娘である。うち娘が非信者家へ嫁入り後非信者になった明確な事例はB。

か信者の消滅する事例も見られたため (GHI③④)、そのような要因からも、信者の減少要因を挙げることが出来よう。一部米里の信者の「子供の代になると、幼児洗礼は受けていない例が多く、早晩にこの代で人首のカトリックも消滅してしまうのではないかと考えている。¹⁸⁾」との言からも伺えるとおり、平成5年当時将来への不安を感じている信者の心境が見られた。

(3) 他宗教に変わった家事例

ハリストス (昔の教会信者) 表6 (p80) の場合、檀家になったGHIの2軒は共に信者である家人が戦前に亡くなり、その後檀家になった事例。Gは家ではG S.B 個人のみが信者であり、Hは元来一家あげての信者であったが、Iの子の代に一家あげて檀家になった例。他方ハリストスからカトリックに変わった事例も1件あったようで、表6 (p80) IIは代々ハリストスの信者家だったが夫婦でカトリックに変わった事例である。またカトリック昔の教会信者の表8 (p83) ⑤事例も、元来一家カトリック信者であった家が、母と妻と子供が未信者であったため、夫 (唯一の信者) 没後に一家で檀家になった事例である²⁴⁾。

5・1章にあげた地域の過疎化要因以外にここ5・2章では、幼児洗礼をしなくなってきた事が原因で、その後の新たな洗礼家族が出てこない現状をもたらしている側面がある事を述べた。そしてさらにこれが信者の減少につながる理由の二つ目としてもあげてみた²⁵⁾。ここ5・2章にあげた幼児洗礼のこのことはキリスト教が、日本の檀家や神社氏子のように家の宗教として固定されたものではなく、あくまで個人の信仰レベルで、信者になるか否かとなりうることをも意味しているといえよう。さて以上、本稿では米里の人口変動、信者の実態、信者の分布等、各方面からの情報をまとめて総合し、信者の減少理由を様々考えてみた。

24 逆に人首における信者増加の事例 (母が信者であったため子供が信者になった家事例) もある。カトリック平成5年現在の信者表7 (p83) ②事例と、カトリック昔の教会信者の表8 (p84) ⑨事例は、檀家であった家に来た嫁 (母) が信者であったためにそれぞれ子供6人も信者になった事例である (父は非信者)。

25 他方、高齢信者の死による自然減にともない、その後の信者数の減少がさらに進んで行った側面も想定される。

終わりに

以上、前稿及川2018では“歴史的・時代的要因”つまり時代から影響を受ける宗教の実態を探ったが、本稿では“地理的・社会的要因”つまり地域社会の人口変動（産業構造の変化と過疎化）から影響を受ける宗教の実態を探ってみた。つまり米里の信者の急激な減少を教団内部の問題のみとして見たのではなく、地域社会の社会状況にもその一因があるのではないかと、否米里の場合そのような原因のほうが大ではないかという事を、信者の実態から即して述べてみた。また信者の減少理由は昭和30年以降の、米里地域からの人口流出が第一であることも結論としてあげてみた。だがそれ以外に、紙面の関係でここでは触れなかったが、「過疎化に至る前過程での、地域社会における基盤産業の構造変化」が静かに進行していた末の米里の人口流出・人口減少現象であったことも見逃すべきではなかろう。このような地域経済（地域社会の基盤産業・構造の変化等）の変化が一教会にもたらす要因に関しては紙面の関係上本稿では割愛したが、人口減少の発端・原因をさらに深く掘り下げる形で、この点について次号以降分析を加えてみたいと思っているところである。さて話を少しもとに戻すとすれば、本稿を通して見えてきたのは、「地域社会における、過疎化のもたらす深刻な影響」であった。米里では、昭和から現在まで暫時、子供たちは仕事を求め外に流出していった。そして父、母のみが残ることになり年を重ねていく。なかには連れ合いをなくし、子供のもとへと一人又一人と米里を後にし、平成5年現在米里に残る信者はハリストス6軒11人、カトリック4軒5人のみとなった。彼らが生きている限り米里・人首のキリスト教はあり続けるが、それもあと数十年のことと思われる（ちなみに平成30年現在再調査の結果、カトリック信者は皆無となり、米里に残るハリストス信者は1人のみとなっている）。近い将来、米里からキリスト教徒が姿を消すのは時間の問題となっている。だがこのような現象はなにも米里に限ったことではなく、キリスト教信徒のいる各地の過疎地域にも共通してみられることなのではないかと思われる

る²⁶。日本の地方における過疎化がもたらす問題、及び地方における日本キリスト教の宗勢の行く末を考える上でこの事例は、地域社会の変化がもたらした末の問題、そして現在日本全国でどこにでも普通に見られるようになった過疎化事象の行き着く先の、目に見える警鐘の一つとして、今後我々に様々な問題を突きつけているようにも思われてならない。

尚、本稿掲載の御快諾を賜った東北大学宗教学研究室の皆さま、本稿調査に際しインタビュー等でご協力いただいた信者の方及び関係者の皆さまには篤く御礼を申し上げる。特に本稿に掲載した信者の方々は既にほとんどの方が故人となられており、生涯を通じて信仰を通じたその人生に敬意を表したい。

参考文献

- ・岩手県教育会江刺郡部会1925『江刺郡志』臨川書店
- ・内海健寿1979「東北地方におけるハリストス正教と地域社会—歴史における宗教と経済—」『会津短期大学学報 人文・社会科学編 36号』会津短期大学
- ・江刺市教育委員会1974『ひとかべ文学散歩』
- ・江刺市史編纂委員会1974『江刺市史第五巻資料編近世Ⅰ』
- ・江刺市史編纂委員会1978『江刺市史第五巻資料編近代Ⅰ』
- ・江刺市史編纂委員会1979『江刺市史第五巻資料編近代Ⅱ』
- ・江刺市史編纂委員会1987『江刺市史第三巻通史編近代・現代』
- ・江刺市史編纂委員会1990『江刺市史第四巻江刺の社寺旧跡』
- ・及川宏幸1996「農村におけるキリスト教の布教—宮城県東和町米川カトリック教会の例（1）—」『東北民俗第30輯』東北民俗の会

26 宮城県登米市東和町米川カトリック教会は昭和30年～43年に限っても一挙478名の受洗者が出たが（及川1996 P75）、調査した平成5年当時に於いては定期的に日曜教会にやってくる人はわずか10～15名ほどの状況であった（H.5.9.12及川調査）。また当時米川カトリック教会神父の高橋昌さんが語ったところによると、京都のある地区に於いては、戦後間もなく信者が大量に生まれたが、現在（平成5年当時）に於いては信者は誰もいなくなったと語っていた。

- 及川宏幸2018「岩手県江刺人首のキリスト教—新たな教会の成立と信者数の変遷から垣間見える時代背景—」『東北宗教学第14号』東北大学大学院文学研究科宗教学研究室
- 波多野和夫1969「新宗教の受容と教会の形成—陸前北部におけるハリストス正教について—」『陸前北部の民俗』吉川弘文館
- 人首ハリストス正教会1909『人首正教会教會日誌』
- 平凡社1990『岩手県の地名』
- 宮城県1961『宮城県史28（資料編6）』
- 水沢カトリック教会1982『江刺市人首カトリック教会 百年間の歩み』
- 米里公民館『郷土教育資料第二輯』
- 盛岡・盛ハリストス正教会連絡協議会1981『盛岡・盛ハリストス正教会管轄教会信徒名簿』

Christianity in the *Hitokabe* District of Esashi Ward , Oshu City, Iwate Prefecture (II)

—— Is church disappearance due to depopulation? ——

Hiroyuki Oikawa

This survey was started in 1991 when I felt doubt and interested. The doubt and interest are as follows: 1) The *Hitokabe* area (Yonesato, Esashi ward, Oshu City, Iwate Prefecture) is a depopulated area at the eastern end of Oshu City, Iwate Prefecture. 2) There are two churches in this depopulated area: Christian Orthodox Church and Catholic Church. There were several believers in 1993, but in 2018 there were only one Orthodox Christian.

In this paper, I analyzed the reasons for the decrease in believers and the disappearance of the Church of the Church from the perspective of “geographical and social factors”. What I found there is the following point. (1) Over the past 60 years, the Yonesato area population has decreased to less than one-third. (2) Believers were concentrated in the commercial district centered on the *Hitokabe*. Thus, extreme population declines led to the closure of believers' stores, home relocations, and population outflows. (3) After that, the believer's children who remained in Yonesato began to leave Yonesato to find a job.(4) And finally, only elderly believers were left behind. (5) The believers died, the number of believers decreased dramatically, and the church disappeared.These processes became clear.

This example shows how serious the problems caused by depopulation are.